

よそ者目線で

地域の宝探しやストーリーづくりがむずかしいという声をよく聞きます。共同通信岐阜支局長として東京から岐阜に赴任した満野龍太郎氏に、取材のプロとして、地域の宝探しとその魅力を伝える極意をうかがいました。私たちにも学べるヒントがみえてきます。

七里・十里めぐり

岐阜
馬瀬

「岐阜見聞録」発行岐阜新聞社、
発売岐阜新聞社総合メディア出版室、
058(264)1820、
1000円(税別)

宝探し 探究心で発想転換



た気持ちも分かる。喫茶店で一休みすれば、モーニングサービスの充実したメニューと店員のぶっきらぼうな(失礼!最初はそう思えたのです)接客態度に驚かされる。

地図を広げると、御嵩(みたけ)とか八百津(やおつ)とか知らない地名ばかりだ。岐阜市のある美濃地方の北には山々が連なり、飛騨地方への道は険しい。探求心がくすぐられる。

実は、東京本社の経済部デスクから岐阜支局長の辞令が出た時、岐阜の「阜」がうまく書けなかった(「阜」という文字は国語辞典にも載っていなかった)。日本のど真ん中にあるのに、都道府県の知名度ランキングも低く、分からないことばかり。知ったかぶりはやめて「素人として、新鮮な好奇心を持って面白がる」ことを貫いた。

何もないことがいい

次はテーマだ。私の場合、人知れずがんばっている人物や、地域に根強く伝わる文化を紹介することにした。いわば地域の宝探しだ。

記者、デスクとして経済問題の取材、編集に長らくあたってきたが、取材対象が政府や大企業に偏りがちだったとずっと恥じていた反動だと自己分析している。

さて、コラムの素材探しを進める。わたしが紹介しなくてもマスコミが何度も扱う素材はできるだけ手をつけなかった。外国人客であふれる世界遺産の「白川郷」(白川村)や、徹夜

の風景でも、他の地域の人たちには魅力的に映るのかもしれない」と考えよう。普段見る景色はより色鮮やかとなり、その素晴らしさを全国に紹介したくなるはずだ。

知らないことが新鮮

コラムを書くに当たって「よそ者目線」を徹底した。岐阜には赴任直後から「面白いな」と思えることが多かったが、地元の人たちは当たり前と思い込んで、その良さに気付いていないようだった。ならば、東京から来た単身赴任のおじさんの目線も小気味よいのではないかと感じた。

県庁所在地、岐阜市にあるJR岐阜駅が東海道線で名古屋からわずか20分という近さにあることからしてユニークだ。駅から少々歩けば悠々と流れる長良川を眺めることができる。金華山から濃尾平野を見下ろすと、織田信長が天下を取ろうとし

面白がって歩けば、日本の地方はどこだってネタの宝庫である。地域で埋もれた素材を見つけ出し、人々の知られざる営みを目の当たりにする喜びは格別だ。

共同通信社の岐阜支局長を務めた3年間に岐阜県内を歩き回った。地元の人たちが「何もない所」と言う地域がほとんどだったが、「よそ者目線」で見て、聞いて、感じたことをコラムにし、岐阜新聞の朝刊に52回にわたって連載した。タイトルは「岐阜見聞録」で、マルコ・ポーロの「東方見聞録」をもじった。

コラムの多くは紀行文とした。「われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか」。フランス人の画家、ポール・ゴーギャンの名画の題名ではないが、探検家や紀行作家になりければ、探究心が高まり、発想を大転換できる。「地域の住民にはありきたり

共同通信前岐阜支局長
共同通信社 デジタル推進局 デジタルサービス部長
満野 龍太郎 (みつの りゅうたろう)

共同通信前岐阜支局長。社会部、経済部で記者、デスクを経験。食料問題、自動車産業、金融の取材が長い。著書に「よくわかる自動車業界」「よくわかる保険業界」(日本実業出版社)など。静岡県出身。上智大学卒。モスクワ大学社会留学。



昭和のにおいが残る街道筋。裏側に回れば、路地が町全体にひろがる。人間の筋肉や骨が体中にいきわたるようで、人々のたくましさ伝わってくる。

踊りで有名な「郡上踊り」(郡上市)は対象から外した。

ある程度知られているネタの場合は、問題を正面から捉えた紋切り型の記事にはせず、人物や出来事をこれまでにないような視点で切り取るような心がけた。

さて、どうやって活きのいい素材を見つけるのか。岐阜県民が読者だから、漫然とした取材では「そんな知ってる」と満足いただけない。「そうなんや〜」と関心を持たれる必要がある。

となると、やぶれかぶれの逆転の発想が効果的だ。県内の「何もない所を歩く」ことを自分に課した。「何もない所ってどこですか」と聞いて回り、地元の人たちに「ネタになるんかね」と変人扱いされたが、ぶれずに進んだ。

情報収集は人に会って話すことが一番だ。地元の方々との雑談や飲み屋でのネタ談議が取材のきっかけをたくさん作ってくれた。おしゃべりはお当地の方言を使うといい。

小さな記事に着目

地元紙の記事をよく読んだ。地域の出来事をあっさり伝える小さな記事が大きなヒントとなった。図書館で郷土の本を予約し、資料をそろえた。インターネットも活用した。フェイスブックなどのSNSも有効で、仮想空間で遠方の方々ややりとりすれば、

自分の興味の範疇でない上に、同業他社からはつかみにくい情報を得る場合がある。

取材の仕込み作業では、食欲にかつ、何かにこだわるのが重要だ。例えば、岐阜の川文化を象徴する鮎を取材するにしても、漁法、生育、水、環境問題とさまざまな視点がある。オリーブ色と黄色に彩られた鮎の体色、におい、鮎が集まる湖の地名という風に、掘り下げれば何でもネタになる。釣り客の高齢化という課題も浮かび上がる。

鮎に魅せられた釣り師たちの人生や言い伝えも魅力がある。5月の稚鮎放流から、6月後半の鮎つり解禁、8月後半からの火ぶり漁、9月の落ち鮎網漁という鮎暦を肌で実感するといい。

統計、データにもこだわる。生真面目な日本人にとって数字は説得力を持つ。

材料集めは総合的に進め、成果を出す時(コラムの場合は取材、執筆)に、思い切って絞込む。

例えば、自分が何のために仕事をしているのかと聞かれ、名刺の裏に一言で書けなければ、自身の役割を分かっていないと言っている。テーマはぶれてはいけない。

ネタのある場所や人に導いてくれる地元の知恵袋(好事家)探しは、とても重要だった。まずは少々失礼に思われても積極的に面会を申し入れる。全く知らない土地に行くのだし、岐阜県人は峠を越えてきた人を警戒するから、エベレストを案内するシェルパのような存在は不可欠だった。素晴らしいシェルパを見つけた時は、天使にめぐり会えたような気持ちになる。

わたしの場合、支局の忘年会を開く時に支局員に必ず同業者以外の知人を連れてきてほしいとお願いしたりして、輪を広げた。

川沿いの集落、馬瀬へ

「何もないなら、馬瀬(まぜ)ですよ」。ネタ探しの中で、同業他社の支局長や、名古屋在住の岐阜県出身者らから同様の話を聞き込んだ。ネットのグーグル検索でも「なんにもない! 緑と水と笑いがある。下呂市・馬瀬地域」と引っかかった。

岐阜県は縦長の県土の西側を東海北陸自動車道、東側をJR高山本線が貫く。美肌の湯で有名な下呂市は、県の東側にあり、電車を使わないと行きにくい。名古屋からJRの特急に乗れば1時間半で着くが、そこから北西方向へ車で30分ほどかかる。アクセスがよくないからこそ、手付かずの自然が残る。



5月に放流された稚魚は、栄養豊富なコケを食べて、1日1ミリの早さで成長。6月下旬に友釣りが解禁に。盛期には約20センチになる。

行ってみると、標高500メートルほどの山あい馬瀬川が流れる。水面が光る。川底の岩がはっきり見えるほど水が透き通っている。地形や流れによって、川の色は瑠璃色や翡翠色に変貌する。

川沿いの集落は南北28キロつながり、馬瀬七里(28キロ)十里(10の集落)と言われる。日本の奥地にある農山村の人口は1300人ほどで、都会人からすると、ある意味確かに「何もない」が、見方を変えれば、何でもある。

満野流チェック表

- ☒ よそ者目線を徹底する
- ☒ 好奇心を持ち面白がる
- ☒ 下調べは大風呂敷を広げる
- ☒ 「何か」にこだわる
- ☒ 優秀な「シェルパ」を探す
- ☒ 地方文化を体験する
- ☒ 作家になりきる
- ☒ 日程は柔軟に、出会いを重視

初夏の夜にホテルが乱舞する。水車小屋と田んぼをぼんやり眺める。飛騨牛が放牧されている。新緑も紅葉も映える。山中に名水がある。学校にプールはなく、子どもたちは川で遊んで育つ。

鮎だけではなく、春は山菜、夏にはトマトやブルーベリーを食する。初秋は「こけ」（飛騨の方言できのこのこと）、晩秋は赤カブ漬け。人々は四季をはおぼり、生きている。

面積の95%は森林で、その四分の一が鮎などの川魚を育てる「溪流魚付き保全林」に指定されている。「日本で最も美しい村」連合に入っているのも分かる。

突然の出会いを大事に

さて、風景を漫然と見るだけでは、ストーリーにならない。鮎釣り名人に手ほどきいただき、鮎の友釣りに挑戦した。なかなか釣れないのであきらめかけていると通りがかりの釣り人がふっと声をかけてくれた。「糸をもっとゆるくせな。鮎の行きたいところに行かせることや。自分が行かせたいようにしたらあかん。鮎はどこにでもおる」。こういう突然の出会い、現地の方のおごらない、やさしい言葉こそ紀行文の要。釣果にもコラムにも貴重な名言となった。

釣った鮎は、スイカのような香りがして、まさに香魚。地元の宿泊施設で焼いてもらい、まるごと食べた。砂が混じっていないはらわたは絶品だ。獲物を食するという、普段は使わない狩猟本能がよみがえった気がした。

「何もない所」は名水が流れ、日本の原風景があった。人の体の半分

よそ者目線で宝探し

探究心で発想転換

以上は水で出来ているだけに、いい水に出会うと人は元気がでるようだ。

人々には東海地方の水源地を守る矜持が感じられ、日本人が失った感性が息づいていた。

懐の深さを感じる

下呂市では、馬瀬川をはじめとする多くの河川が流れ込む金山地域で、江戸時代から続く路地を歩いたこともある。下呂駅の南端にあり、美濃と飛騨の分かれ目にある金山は、木材の集積地として栄え、表街道は餅屋、ふすま屋が立ち並ぶが、街道の裏に入ると、置屋の跡や住居や菜園もあり、生活のにおいが濃くなる。細い道が町全体に広がる異空間を、地元では人の体の筋肉や骨に例えて「筋骨」と呼ぶ。

祭りの準備で忙しい通りを歩いていると、長老がご自宅で集落の歴史やしきたりを教えてくれた。豆腐屋では飛竜頭を試食できた。

こういった予定外の出来事が紀行文のアクセントになる。地域の持つ懐の深さを感じてもらえる。旅行には日程調整が非常に重要だが、臨機応変に日程を変えてもこの地域を歩き回るのは面白いと感じてほしいものだ。

司馬遼太郎になりきる

もっと、想像力を膨らませたいのなら、動画よりも文章の世界に浸る。どこに行っても俳人松尾芭蕉や民俗学者宮本常一や作家司馬遼太郎になりきると、ありふれた景色は美しく見える。

それは農山村の風景であり、しきたりであり、長老の言葉かもしれない。文章には具体性が必要だから、季節や昼夜を感じながら風景や人々の言葉に触れれば、おのずからその魅力は浮かび上がってくる。

世の中に地域の良さをアピールするには決め文句が必要だ。作家藤沢周平のような鮮やかな書き出し、三島由紀夫の最後一文に凝縮され

現代社会と結びつける

失つても香魚は育たなくなるのではないか。尾里さんは「子どもたちに自然を残したい」と願うが、環境の変化はじわじわ進む。木曾川や琵琶湖で捕った稚魚のほか、人工ふ化の稚魚も放流しているが、人の手がかかったせいか縄張りをつくらず群れる鮎もいる。追わない鮎もいる。急流がなくなり、背が大きく盛り上がった筋骨隆々の鮎は見かけなくなった。作家井伏鱒二も訪れた、欲を捨てて守りたい里山がそこにあった。

(2014年7月24日)

作家を登場させる

水の里の旅コンテスト 最優秀賞に

下呂市は、馬瀬川流域の地域づくりや金山宿筋めぐりなどを組み合わせたツアーを企画し、国土交通省が主催する「水のめぐみ」とふれあう水の里旅コンテスト2015で最優秀賞を獲得した。東海地方の水がめである岩屋ダムの水源地域を訪れ、水の恵みを1泊2日で体験。ダムでカヤックを体験、馬瀬川で火ぶり鮎を見て、鮎の塩焼きも食べる。観光課は「森が水を生み、山水が鮎を潤し、里をめぐって馬瀬川の鮎を育てる「水の里」を楽しんでほしい」と話している。

自然描写は詳細に

セキレイが鳴き、薄紫のネジバナが咲く。アカザやヨシノボリが泳ぐ。どれを

歴史とひも付ける

決定的な言葉を盛り込む

馬瀬川の鮎はその美しさで全国有数の誉れを持つ。高山市の竜ヶ峰を水源とし、山あいを通れる。保水力に富んだ広葉樹と手入れされた針葉樹から土砂はあまり流れ込まず、良質のコケが育つ。太公望は鮎のはみ跡を見つけた大漁を妄想する。2尾目がなかなか釣れないでいると、近くにいたベテランに「糸をもっとゆるくせな。鮎の行きたいところに行かせることや。自分が行かせたいようにしたらあかん。鮎はどこにでもおる」と指導いただいた。

馬瀬川の鮎は、その美しさで全国有数の誉れを持つ。高山市の竜ヶ峰を水源とし、山あいを通れる。保水力に富んだ広葉樹と手入れされた針葉樹から土砂はあまり流れ込まず、良質のコケが育つ。太公望は鮎のはみ跡を見つけた大漁を妄想する。2尾目がなかなか釣れないでいると、近くにいたベテランに「糸をもっとゆるくせな。鮎の行きたいところに行かせることや。自分が行かせたいようにしたらあかん。鮎はどこにでもおる」と指導いただいた。

感性をとぎすまず

第一印象を大事にする

飛騨川の支流である馬瀬川に膝までつかかり、瀬音に抱かれた。川底の藻岩が一つ一つはつきり見えた。ブナやアカマツが育てた清水が流れ込み、鮎が跳ねた。「竿さお」を立てて。おとりを泳がせて。南飛騨馬瀬川観光協会の尾里集務さんが師匠役になってくれ、鮎の友釣りに初挑戦した。胴長をまとい、竿をたれること30分で当たりがきた。深めの瀬でひとり鮎に野鮎が体当たりし、仕掛けた針に引つ掛かった。長さ9メートルのカーボン竿がしなる。ぎこちなく釣果をたもに収めた。

キーパーソンを探す

馬瀬川で友釣りに挑戦

残したい自然を体験



「おいしい鮎は森を見てとれ」と言われる。馬瀬川の釣り場は新緑で囲まれ、深呼吸したくなる。

原石はどこにでもある

岐阜県には42市町村があるが、下呂市だけでも、この原稿には書ききれないほどの出会いがあった。

支局のあった岐阜市では、川端康成が初恋の相手と記念撮影した写真館（支局のすぐ近く）取材できた。散歩道で、彫刻家ロダンのモデルになった旅芸人花子のお墓に出くわした。子孫にも会えた。通勤途中にある昔ながらの甘納豆屋で、甘納豆の蒸し方を教わり、華やかなりし

柳ヶ瀬商店街の様子をうかがった。

中濃地方では東白川村へ伝説の生き物「ツチノコ」を探しに行ったら、桑畑に手入れしていた老女にめぐり会い、蚕室でカイコが糸を出す瞬間を見せてもらった。

西濃地方では、伊吹山のふもとで、薬草のおかげで病気知らずという女性に会えた。「何の変哲もない山の町」と町史に記している大垣市の石上津では、木曾3川の治水事業に取り組んできた人々の努力を知った。

岐阜市から電車とバスで6時間かけて飛騨市神岡町の山之内村小中学校へ向かうと、全校生徒8人の素敵な笑顔を見ることができた。

岐阜県は地域によって気候も大きく違う。夏場に気温が40度を超える多治見市と、真冬にマイナス25度を記録した高山市がある。街道で峠を越えれば人々の暮らしぶりはさまざま、素材がない訳がない。

原石はどこにでもある。本物の原石を見つけ出し、磨くのは、あなただ。